

# 富士講の研究

— 富士講身祿派の信仰から見られる前近代信仰生活 —

渡 邊 秀 司

## 要 旨

### 富士講の研究序論 概略

本稿の目的は、江戸中後期に江戸近郊を中心に流行した富士講に対する考察を通して、前近代の信仰生活と前近代以後の信仰生活との連続性と差異性を明らかにする試みの第一歩となる論考である。

まず富士講について概観し、次に富士講が経典とした「三十一日の御巻」について概説した。そして、次節以降富士講がその信仰で約束した「救い」と、それを保証する「神」を中心に、問題の提起を試みた。

キーワード：生れ増、救い、神

## 1. はじめに

この論考では、数多くある山岳信仰の中から、富士講と一般的に呼称される信仰集団および宗教活動の歩みを振り返りつつ、富士講の隆盛を築く礎となった富士講身祿派に焦点を定め、身祿派が形成した宗教性、ひいては身祿派がもっても流行した江戸中後期の信仰活動が持つ宗教性について考察していこうという試みの第一歩となる序論を展開していきたい。その試みを進めていく前に、研究対象となる富士講の概観をまずは述べていこうと思う。

広義の富士講は、富士山を神の宿る聖なる場として神聖視し、その神聖なる場である富士山のもつ聖なる力に対する信仰を持つ人達によって形成された信仰集団である。信仰を持つ人達は住む地域ごとに集まり講組織を形成し、聖なる場である富士山に登る。そして、聖なる場にはいることによって、その聖性を自らに受け取り、さまざまな利益を得ようとする。そして、登ることのでき

なかった人達にも、その利益を分け与えようと聖性の宿っているとされる御札などを購入し、それを登ることのできなかった信者達に分けてあげる。この点だけを考えると、他の山岳に対する信仰に基づく講、例えば御岳講、愛宕講などと細部における違いなどは見られるであろうが、山岳に宿る聖性を崇めるという点、信者達はその聖性が与えてくれると信じる現世利益を得るために、山へ登るという点などにおいて、厳密に考察するならば、信仰の性質に差異というものを見出すことはできるであろう。つまり、今まで述べてきたような山岳信仰ごとにその性質の概要として異なるということはない。それでも、富士講には他の山岳信仰にはない独自の展開が見られた。他の山岳信仰と富士講との差異はいかにして発生し得たのであろうか。いかなる契機において、富士講は独自性を持ち、他の山岳信仰にはない性質を持つにいたったのか。

次に、富士講の成り立ちについてかいつまんで述べたいと思う。富士講は富士修験の行者の一人である角行という行者によって創始されたと言われる。角行は本名長谷川左近藤原武邦、肥前長崎の人である。若い頃から信仰の道に進み、富士で修行に励んでいたそうである。彼の信仰は修験道の流れを汲むものであったとされている。彼自身は伝説の域にある人なので、正確な伝記を書くことは不可能だとされている。<sup>1)</sup> ただし、彼の富士修験での信仰はその弟子達に受け継がれ、そして、彼の弟子達が角行の信仰を細々とつないできた。その弟子達から6代目がこれから述べようと思う、食行身禄なのである。

従来から言われていることとして、富士講の独自性という点を考える際に述べられる点は、富士講の行者であった、食行身禄の業績である。<sup>2)</sup> 身禄は本名伊藤伊兵衛、伊勢（三重県）の出身で、13歳の時に江戸へ丁稚奉公に出され、江戸での商売に成功しかなりの財を得た。しかし、以前から信心していた富士講の信仰に目覚め、一切の財をすて信仰の道に生きることを選ぶ。信仰に生きる身禄は六十八歳で富士に登り入定することを誓っていたが、六十三歳の時に信仰する富士山の神である仙元大菩薩<sup>せんげんだい ぼ さつ</sup><sup>3)</sup> から霊夢を受け、五カ年早めて富士に登り、入定、つまり信仰の道を全うするための死を選んだ。その際に、自らの考え方を述べたのが『三十一日の御巻』<sup>さんじゅういちにち おんまき</sup>というもので、富士講では聖典としてあがめられた。この『三十一日の御巻』の中で、身禄は従来からある呪術中心の信仰から、安丸吉男の言説を借りて述べるなら、「実践道徳」的な面を重視

する教義を展開させた。<sup>4)</sup> この点については論考の余地があるが、また別の機会に行うこととする。

身禄の死後、身禄の考えを受け継いだとされる弟子たちによって、布教が行われた。身禄の流れを汲む行者は数多くいるが、特筆すべきは以下に述べる伊藤参行・小谷禄行という二人の行者である。そのうちの1人である伊藤参行によって、身禄の独自性がより明確なものへと変化したとされている。伊藤参行、本名は花形浪江、京都の人で身禄の娘一行お花に教えを受け、身禄の名跡である伊藤姓を名乗り、さらに伊兵衛と称した。彫金師として生活をしながら、熱心に教えを説き、さらに富士信仰と加持祈祷との分離を試みたとされている。<sup>5)</sup> 参行は身禄の教義をさらに発展させ、身禄の述べていた四民（士農工商）に関する言説をより平易に、そして身禄のそれよりもより平等なものにした。参行の頃までには参行1人の業績では決していなかったが、富士講といえば一般的に身禄派のことを指して言われるようになり、参行の展開させた思想は、その弟子である小谷禄行（三志）によりさらなる展開を見せる。小谷禄行（三志）は武州（東京都）鳩ヶ谷の人で、俗名は庄兵衛という。行者として苦行修行をしている最中に参行のことを知り、彼に弟子入りする。参行もまた彼の弟子入りを深く喜び、その教えを彼に伝えた。禄行の教えは孝を重視し、社会奉仕の実践を強調する精神活動として、その教えは禄行自身の布教活動も手伝って江戸周辺の農村にひろがり、禄行の一派は不二道と自らの事を唱えるようになる。<sup>6)</sup>

以上のような流れ以外にも、様々な活動もあり、それらが積極的な布教活動を行い幕末から明治期にいたる頃までには、江戸周辺を中心にかなりの勢力を持ち、「江戸の八百八講」などと称されるくらいに浸透する。そして、明治になり、政府の宗教政策によって富士講は教派神道に取り込まれるもの、そのまま旧来の信仰を保つものなどに別れていく。現在は江戸期の流行に比べれば構成員の人数、講社の規模など見る影もないが、他の講社などと合同しながら、信仰を保ち続けている例などもある。<sup>7)</sup>

駆け足であるが、山岳信仰の一つとしての富士講と、食行身禄という富士講の行者によって変化した富士講身禄派の概略とその歴史について述べた。富士講がその独自性をもって社会に対して影響を与える事を可能とする信仰となる

ためには、食行身禄が生みだした教義とも言うべき『三十一日の御巻』が、富士講が独自の展開に向かっていく上で決定的な原因ではなかったとしても、富士講という信仰が新たな転機を見出すこととなる為の一要素として必要であったことは確かである。『三十一日の御巻』というより、食行身禄という1人の行者が現れなければ、富士講は山岳信仰に基づいた代参講の域を出ることはなかったであろう。もちろん、食行身禄1人の影響が巨大な信仰組織を形成するための原動力となり得たとは考えにくい。身禄以後の身禄の弟子たち、そして、その弟子たちの布教活動が、実質的な富士講の流行を生みだしたと考えるべきであろう。しかし、私は食行身禄と言う人物は、富士講が新たな展開を見出すためのいくつかの因果が結びつく「結節点」ではないかと考えている。では、なぜ食行身禄が「結節点」であると言えるのかについて、その事を詳細に考察するのはまた別の機会にしたい。それよりもまず最初に食行身禄の考え方が現れ出たであろう『三十一日の御巻』について考察する。この史料に見られるであろう考え方をまとめながら、これから考察を深めていくための論点をいくつかに絞っていく事で、「結節点」に結びつきたいいくつかの因果の正体を仮定し、それが信仰にどのように関連していくのかを今後考えるための一助としていきたい。言うまでもなく、伊藤参行や小谷禄行らによる教義の展開も、『三十一日の御巻』があってこそ成立したものであろう。これほどの影響を、富士講という山岳信仰に与えた『三十一日の御巻』について、とりあえずは考えていく必要があるのではないか。次節では、『三十一日の御巻』についてその概要を述べていく。そして、その史料に見いだせるであろう、富士講の信仰の持つ特徴についてさらに考察していく。以上は、これからの研究の展開に向けての出発点として、この論考を位置づけられるようなものとしたい。

## 2. 三十一日の御巻について－その概要

前節で述べたように、『三十一日の御巻』(以下「御巻」)は食行身禄が死に際して、言い残したことを弟子が聞き書きしたものである。「御巻」の構成は1日1話の講話形式となっている。「御巻」は以後富士講では聖典とあがめられ、信仰の原理として成立するにいたった。これから、その聖典について検討

を行うわけであるが、丁寧に1日1日を追って読み進めていく方法は、それを専門に研究する研究者であれば当然ではあるが、この論でそれを行うことは難しい。井野邊茂雄が『富士の信仰』で「御巻」について言及している部分があり、その論は、「御巻」の中に書かれた内容に即した概説であり、それなりにまとまったものとなっている。そこで、本稿においては井野邊の「御巻」についての論旨を参照しながら、原本を読み進め、「御巻」の概要を述べていくこととする。

まずは、井野邊が概説した「御巻」についての内容を述べていきながらも、「御巻」の内容を追いつつ、その説明をしていくことから始めていく。井野邊は「三十一日の御巻に現はれたる身祿の思想」と題して、概説をはじめている。彼の論の中にも「実践道徳」という言説が出ている。井野邊が言う「実践道徳」の出発点は、身祿が神として崇めていた「仙元大菩薩」に対する報恩にある、というところから出発して、原典を抜粋しながら内容の概略を行っている。先程述べた、仙元大菩薩に対する報恩について、それを出发点とする理由として、井野邊は「一仏いちぶつ一体いつたい」という概念があると言っている。<sup>8)</sup> この一仏一体という概念は、「御巻」の中でも、仙元大菩薩と信者との関わりを論じていく際によく出てくる概念である。「御巻」によると、世界が空々寂々であったとき、「水こりかたまり御山出現」したが、人が世界を治める頃まではその姿を見せることはなく、孝安天皇の時代になって<sup>9)</sup> その姿を現したとされているが、仙元大菩薩はそれよりも先の月日が生まれたのと同時に生まれたのだ、と考える。くわえて仙元大菩薩は月に象徴され、月は水によって形成されている。人間も「胎に舍る時、まろき露」であり、その露がかたまって人となる。それゆえ、人間も仙元大菩薩と同様なのである。<sup>10)</sup>

この事は仙元大菩薩は水によって形成され、人間は人間の胎内の中で露（水）が凝固まって世界に発現したという論理で、神と同様の性質を持つ人間の中には神性があるのだ、ということを示そうとしている。この論理は、身祿の信仰の出发点であり、従来からある加持祈祷に対する批判的な姿勢の根幹でもありと考えられる。この思想は、仏教の胎藏の考え方とも酷似しており、その事から身祿の宗教的素養を垣間見ることができる。

井野邊の概説は、次に身祿が唱えた米穀に対する恩、登山の意義についてま

とめている。米穀は仙元大菩薩が大地に蒔き、人間たちの食物とされたものであると「御巻」には書かれていて、<sup>11)</sup> 米はもっとも大切にしなければならない食物だとしていると、井野邊は述べている。登山の意義については、仙元大菩薩はすなわち富士山であり、富士山は衆生が登ることを好む山であるとしており、衆生は心清らかにして、御山へ登るべきであると「御巻」では説いていると、井野邊は述べている。<sup>12)</sup>

以上に述べたようなこと、米すなわち食物一般を敬い、心清らかに山へ登ることは、仙元大菩薩に対する報恩をしめすための行いであると、「御巻」では述べている。そして、信者が生を受けることのできた恩は、父母によるものと言うことで、父母への孝行について、さらに詳しく述べている。この事は先程述べた「一仏一体」が概念の根幹にあるということは明らかである。父母への孝行から不義非行の戒め、武士の忠義の大切さを説き、それらがいかに重要であるのかについて説いている。父母への孝行、武士の忠義の教説についてもう少し詳しく見てみよう。

「御巻」によると、人間の生は「一仏一体」という考え方から、仙元大菩薩が生じたのと同様の方法で生を授けられ、自らに生を授けてくれた父母にはさらなる孝養を尽くすべきである、それは仙元大菩薩を敬うことにもつながるのである、としている。<sup>13)</sup> さらに、そうした考え方から仏である人間に貴賤の隔たりなく人間は尊きものであり、その尊い身を「無道にして其の尊き我体<sup>わがからだ</sup>を知らず、邪をなす衆」は「四民の外にはなされ人非<sup>にんひとともに</sup>其生まれおとる人間」となってしまうのである。そうならない為に、武士は主君に対して忠勤に励み、主君に対して誠意を尽くさなければならず、農民、職人、商人は自分たちがなすべき仕事を真面目に果たすことが重要であるとしている。<sup>14)</sup> さらに、後半部において、その忠義が忠義を尽くす人に届こうとも届かずとも、そのようなことを考えてしまうこと自体が、その忠義に邪な心のある証拠であり、本当の忠義とはその様なことを考えてはいけなないのであるとし、孝行もまた同様の心掛けで行わなければいけないのだ、としている。<sup>15)</sup> つまり、忠孝の精神は見返りなどを求める、打算的なものであってはならないのだと言うのである。さらに、四民が互いにおのれの勤めを果たし、助け合うことが天下の政治にかなうことである、としているのである。<sup>16)</sup> このようなことを述べた後に、四民の身分秩序

に関する考え方を展開している。身禄は四民の義務を果たすことについては力説したが、その平等を説くことはしなかった。

「御巻」によると、富士山を須弥山しよみせんになぞらえて三十三天と称することはそれ程の差異はないとし、その様に世界<sup>17)</sup>の人間には三十三の身分的な開きがあり、今まで述べてきたような徳目を真摯に実践すれば、後の世になれば現世の身分よりもより高い身分に生まれ変わることができ、実践しなければ、現世の身分よりも低く、餓鬼畜生道に墜ちていくのである、と言うのである。<sup>18)</sup> この事は、身分というものを既成の事実として認めると言うこと、つまり現在ある秩序を認めていくと言うことである。さらに男女の差別についても身禄は明確に述べている。女性は元々五障三従<sup>19)</sup>の罪があり、それを富士信仰の行を積むことによって除いていこうと説くのである。<sup>20)</sup>

身分制秩序や、五障三従といった限界をもちながら、身禄が説こうとしたことは、井野邊の論によると、まず「人」となることに努力しなければならないということであった。ここでいう「人」とは、誠の人間、誠意をもつ人間であるということであった。「御巻」によると、人間の境涯は良いことを望めば善いように事が進み、悪事を望めば、悪しき方向に事が進む。人を人として接し、下の者を見下すことなく付き合えば、その恩は帰ってくる。そういう行いを続けていけば、人間として角の取れた、よい人、ひいては神とも仏とも敬われるような人になることができ、そうなるように勤めることが堂塔伽藍を寄付することよりも重要なのである、と説く。<sup>21)</sup> この事から、人間は誠意を貫くという態度が重要である、と「御巻」は説くのである。

以上が「御巻」の概略である。簡潔にまとめるならば、「御巻」にみられる身禄の考え方は一仏一体という考え方にはじまって、「仏」に対する報恩を意識し、その報恩を返す方法として父母への孝養、主人への忠節などを説き、その際の心掛けとして誠意を大切にすることであった。では、こういった信仰を実践する為の行を行うことによって何が宗教的に約束されるのであるか、先程から出ていた「実践道徳」とは何を指して述べているのかと言った、ここに示されている身禄の考え方、ひいては江戸中後期にかけて発展してきた信仰を考える際の諸命題について、次節以降では、考えていくためのきっかけを考察していきたいと思う。

### 3. 「救われる」と言うことについて

今更ではあるが、宗教とは何か、と言う単純であるが限りなく深遠な命題を、宗教を研究していこうとする人達は考え続けていると、私自身は考えている。宗教を研究する場合、個別的な命題の設定に違いがあるし、それは当然の結果と言えるのであるが、宗教という現象一般を研究する際の究極の命題は「宗教とは何か」という事である、と言うことは決して誇張されたものではないであろうし、その様な深遠かつ明確な把握の難しい命題は、なんらかの形で現れてくる。それは、宗教と呼ばれる現象を研究していく際に、論によっては明確な形で定義されるかもしれないし、逆にそうならないかもしれない。むしろこの点は曖昧なままで、結果を得ることなく終わってしまう場合が多い。この節でもその宗教とは何かと言う命題を明確に定義することはできない。しかし、個別的な命題の一つであり、宗教の一要素でもある「救い(救済)」という要素について少し考えてみたいと思う。「救い」とは一体何を指して救いと言うのか、今回は一般的に言われる定義をまずいくつか述べた上で、今回の中心となる研究対象である富士講身祿派の事跡と「御巻」の内容を参照しつつ、大まかな定義を試みてみたい。今回は試みることはできないが、最終的には、「救われる」という事のもつ意味について整理を試みるつもりである。

「救い」と言うことはよく言われているが、何を指して「救い」というのであろうか。まずは一般的な定義をいくつか述べてみたい。

宗教については、古くから社会学においてもその主題として研究がなされてきた。また多くの人達は何らかの形で「救い」という言葉について研究をしている。一般的な「救い」という概念についての定義は、この世と人間は根元的な限界を抱えているとして人間の苦悩を強調しながら、そうした限界と苦悩が聖なるものの力でトータルに解決された至福の状態があり得るとするものである。神々や呪術によって病気や災難などの個別的な苦悩が解決されるという信仰は古くから民衆の信仰の中に普遍的に見られるものとされている。<sup>22)</sup> さらに別の定義によると、病とかその他の厄災が身にふりかかったとき、あるいはそのような危機が切迫していると感じられたとき、人間はそれを自分の力で脱却



できないと知った際に、なにか自分を越えた超人間的な力に頼ろうとし、その時超越的な神、または超自然の力といったものによって「救い」を得ようとするのが、広義の意味での救いである、としている。<sup>23)</sup>

以上のような定義が「救い」の一般的な定義として考えられている。「救い」を求める心情は、人間には逃れることのできない苦しみがあり、それでもその苦しみから逃れたいという強い思いが「救い」を求める心情であり、この心情が「救い」の動機である。そして、「救い」を得るための方法として、信仰という社会的な現象が発生したのである。あらゆる信仰には何らかの形で現世にある普遍的な苦しみ、すなわち仏教的な言い方をするならば「生老病死」が人間に与える苦しみを、その信仰のあり方によってそれらに対する対応を説き苦しみを緩和する、ということを動機の一つとして持っている。普遍的な苦しみからの救済と、「救い」を得るための方法は、その信仰の持つ性質によって左右された。富士講も信者に対して「救い」を保証する信仰として出発した。次に富士講の「救い」を得るための方法、とくに食行身禄が考えて信者達に伝えようとした「救い」を得るための方法について概略を述べたい。

食行身禄が伝えようとした「救い」を得るための方法をこれから考えるのであるが、彼の当時の世相に対する考え方を端的に示している史料がある。「お添書の巻」と言う史料で、他の研究者もよく引用する文献である。以下に一部を引用する。

「・・・天子<sup>24)</sup>の我が身の役目おもしろす・・・いろいろにこしらえ 金銀おもつて諸くわんろく（官禄）をそれぞれにとらせ金銀おとり その諸くわんろくのこしらえおもつて衆生のものおばかしとらせ金銀をとり上げさせ そのとりやうのかがみおこしらえ 金銀おも土蔵ゑかくしおかせようじん金などとして 諸しょくにん諸商人とふのはらいとふもいたさず たみおいため まえしりのあく生の事ばかりに 天子天日お初めとして おもてむきのみちばかり けつこうにみせて こころのうちはしりておれども あくにばかりに金銀おつかいすて かみだつばかりによきやうにいたし しものものはすこしのこともあらためとがにおとし・・・やくにもたたぬはつとうきびしくして ぼさつおも高直にして・・・」<sup>25)</sup>

以後、「お添書の巻」には当時の政治に対する身禄自身の憤懣が語られる。身禄はこの様な世の中を憂い、「我は六十八さいの寿命なれども、六十三さいにして」富士山へ登り入定し、この世を守っていこうと決意するのである。

この様な動機は、一般大衆を救うことを志向する信仰にはよくある理由であろう。文脈から外れるかもしれないが、島蘭進は救済宗教の枠組みについて興味深いことを述べている。救済宗教は「救い」の約束、「救い」の追求が核となるような宗教であるとしている。そこで言われる「救い」とは、人間というものが救いを必要とする苦境の中に生きているという思想を前提とし、人間の苦難、難儀に思いをこらす思想なのだとしている。<sup>26)</sup> また、苦難が重くのしかかる生活は「地獄」であり、「救い」はそういった「地獄」が解決された平穏な世界なのである。家族や仲間の平穏な日常であるのだとし、そのために最も重要なのは「心なおし」、つまり、心の持ち方を改め、他者につねに善意と感謝の念を持って対することが、「救い」を得る方法としてあるのだというのである。そして、ここで得られる「救い」は現世、つまりこの世で得られる救済であるとしている。<sup>27)</sup>

島蘭の論は、現代の新新宗教と呼ばれる宗教を考えるために展開されたものであり、富士講のような信仰を、そのまま島蘭の言うような性質を持った信仰であると言うことはできない。しかし、身禄がその書で述べているように、身禄が提唱する信仰は、衆生を世間の苦しみから救い、解放するということを志向する信仰である。では、どのような言説から「救い」を志向する信仰と言う事が可能であるのか。また「御巻」に示された言説を中心に述べてみたい。

「御巻」にはよく「生れ増<sup>うまれます</sup>」という言葉がでてくる。この言葉に身禄の救いについての考え方が示されているのだ、という解釈が一般的である。前節で述べたような、「御巻」に示された信者がなすべき事を真摯に勤めることができるほど、生活はより良くなるのである。それを身禄は「生れ増」と表現する。それは、現在ある時点よりも、より良い結果が待っているということである。島蘭の言説を借りて言うならば、平穏な日常というべきかもしれないが、身禄の言う「生れ増」はこれよりも、積極的なものである。平穏な日常ではなく、「富貴自在の身」となるために、「御巻」に示されるようなことを守ることが重要なのである。この「生れ増」は来世の「救い」にも適用されている

点も見逃すことはできないだろう。<sup>28)</sup>「御巻」にあるような、信者として守るべき事を実践することで、来世もより高い身分に「生れ増」のである。身禄は「生れ増」という言葉に、生老病死といった苦しみから逃れる平穩な「救い」よりも、現世の富を得るための方法として考えていたのであろうか。では、仏教が言う「生老病死」という苦難についてはどのような言説が展開されているのか。身禄は「御巻」の中で、この点に関しては「御詠歌」と呼ばれる短歌を残し、さらに御身拔と言う呪文を残すので、それを唱えれば衆生を病苦から助けることができるだろう、といっている。<sup>29)</sup>「生れ増」という観念にかかわる言説に比べれば実に簡潔なものであると言える。もしくは、「生れ増」と言う概念が仏教で言うところの苦難を含めたすべての現世利益を保証するものであったのであろうか。それとも身禄にとっての「救い」は、現世における富と身分にかかわる事であったのだろうか。この事に関しては、より詳細な検討が必要かと考えている。

#### 4. 「神」の意味について

M. エリアーデは「人間が聖なるものを知るのは、それがみずから顕れるからであり、しかも俗なるものとは全く違った何かであると判るからである。」と言い、この聖なるものの顕現を聖体示現 (Hierophanie) と概念づけた。<sup>30)</sup> 前近代社会にとって、古代社会から前近代社会の人間は、聖なるもののなかで、あるいは清められた事物のすぐそばで生活しようと努め、その理由は、聖なるものは力そのものであり、究極的には実在そのものを意味するからだ、と、エリアーデは言う。この言説は、興味深い示唆を与えてくれるだろう。聖なるもの、神聖な世界とされる、近代知からすれば非現実的な世界を構成する力を俯瞰するための一つのみかたと言える。エリアーデは宗教史と言う観点から、宗教のグランドラインを構想した人であるが、宗教を研究する際に、非現実的な力が宗教に付与する力の意味を考えることは無意味なことではないはずである。本論においても「非現実的な力」について考えてみたい。この非現実的な力について、いかなる概念をもってそれとするかはいろいろと想定が可能であろうが、この節においては「神」という概念について少し考えてみたいと思う。まず神

についての定義について概観した後に、本論は富士講を主題とするものであるから、最初に広義の富士講が設定する神について考える。そして、身祿が考える神について考えていきたい。

「神」の概念について、普遍的なものを考えるとすると、それは抽象的な言説とならざるをえない。「神」という言葉を聞いて、(God)を想定する人もいるであろうし、「カミ」を想定する人もいるであろうからである。ウェーバーが言う「現世を超越する創造神」と、旧来の民俗学と呼ばれる学問が想定してきた「カミ」は当然の事ながら全く別の概念である。ウェーバーは『宗教社会学論集』のなかで、ウェーバーは「模範」預言と「使命」預言の二つの軸を設定している。「模範」預言とは、救済へ至りつく生活の、通例は瞑想的で無感動的・エクスタシス的な生活の模範を身をもって示すような預言であり、「使命」預言とは、神の名において、倫理的な、しばしば行動的・禁欲的な性格の要求を現世に突きつけるような預言をいう。<sup>31)</sup> この二つの預言によって示された軸は、禁欲と神秘論と言う軸と「神の道具」と「神の器」という軸を更に設定するための布石となるものであったと言えるのではないかと考えている。人間は神の道具とならなければならないとする考え方と、人間は神性を自らの中に受け入れることで救われるという考え方、そして、神の意に叶うための方法として禁欲を行うことと、瞑想などに示される神秘論的な方法があるという事を、端的に述べるなら神と人との関係性をウェーバーはここで考察している。大まかな概観を試みても判るように、ウェーバーが語る「神」は人間に対して超越的である。ウェーバーの考える神概念は、「救済」を得るための権威づけとしての「神」のあり方と考えられるが、これ以上彼の宗教論を論じることは本論の主旨に反するし、ウェーバーは、神観念よりもより重要な命題について更に深く言及している。

さらに、ウェーバーとは別の視点からも神について考えてみたい。神について、折口信夫が興味深いことを述べている。彼は「鬼の話」という小論で、「神も現今のように抽象的なものではなくて、もっと畏しいものであった」と述べ、今日のように神が考えられるようになったのは神自身が向上したからだという。古い神は「常世神」と折口が呼称する神で、常世神とは年に数度海の彼方の常世の国からやってくる神で、その常世の国のありかが山であったり空

の彼方であつたりと変化し、それが高天原の神々という構図をも生み出すことになったのだと、折口は言う。<sup>32)</sup> つまり、神は本来怖ろしいもので、人力をこえたものと言う考え方である。ウェーバーの考える神のように、救いを保証してくれる神ではない。むしろ、ここで言う神は人に害なす事も多いとされている。

以上、全く前提の異なる概念から発生した神観念を概説してみた。元来、問題意識の違う学問が想定する神概念について、比較すること自体が無意味なのかもしれないが、以上に述べたようなことは、これから富士講の神観念を考えるうえで興味深い示唆を与えてくれるように思われる。では、富士講の信仰が言う「神」とは一体どういう「神」であるのか。まずは、富士信仰の中で信仰されてきた神について簡単に考えてみよう。

富士信仰の研究者の一人である遠藤秀男によると、富士山に対する畏敬と崇拜の念は、神秘神霊の宿る富士と言う考え方、もう一つは全然別な荒々しい火の神の猛威が与える畏怖感にあったのではないかと、言うものである。<sup>33)</sup> これが、富士山に対する信仰の起源と考えてもいいだろう。霊山と呼ばれるような山の例に漏れず、富士山でも山岳修験が盛んとなる。神仏習合という現象も当然のように富士山の信仰の中でも発生する。富士講がその開祖とされる角行によって創成される頃も、従来からある修験道の行法に従って信仰が保たれていたように思われる。ここでは修験道の成り立ちなどを詳しく考えることは出来ないが、修験道が密教と深いつながりをもつ信仰活動であるという事は、これから考える富士講の神の考え方について大きな影響を及ぼしたことは、自明のことである。しかし、身祿の頃までは富士講で「神」と言う信仰の対象として考えられる存在は、修験道によって集約された神、折口などが言うような「敬い畏れる」神であつたように思われる。この点は更に詳しく検証を進めていく必要があるだろう。では、身祿はどのような神を設定し、自分の弟子達に伝えるようにと述べたのであろうか。

身祿の神の考え方は先程も「御巻」の概説のなかでも述べたが、「一仏一体」と言う概念である。再度「一仏一体」について簡単に述べるならば、富士山に象徴される仙元神は、富士信心の信者達の中にも同様に存在しているのだ、という事である。安丸はこの事から、富士講の唯心論的世界観を結論づけている。

安丸によると、食行身祿の考え方は、幸せな世界を形成するためには人間の努力が重要であり、努力という人間の主体的契機を重視することで、周囲に呪的権威は消え去り、人間の現実生活が重視されたのだとし、今述べたような考えによって呪的権威から解放しようとしたとき、人間の内面的権威、つまり「心」の重視に転換させる必要があり、そのために「一仏一体」という考えが展開されたのだというのである。<sup>34)</sup> 安丸のこの考え方は、安丸自身の命題である、日本の近代化と言う命題が前提にある考え方である。つまり、ウェーバーの問題設定を日本の近代化に応用していく試みの中から生み出された考え方であると言える。この考え方そのものを、身祿が考えた神観念として考える必要はないだろう。身祿が「心」という設定を、富士講の信仰の中で考えていこうとしたのかどうかは、検討してみる必要がある。安丸自身も言っているように、旧来からある伝統的な信仰に関する考え方を、身祿の解釈によって富士講の信仰の中に同化していっただけなのかもしれない。ただ、ここで言えることは、身祿は富士講の信仰によって理想的な生活を得ることが出来るとしたこと、理想的な生活を得るための方法は簡潔で具体的なものであること、その方法は仙元神によって保証してくれているということと言えるだろう。この点だけ見ると、仙元神はウェーバーが設定するような「超越的な神」であるとも言えそうであるが、実際同様なものでありうるのか。今後の検討課題と言えよう。

## 終わりに

富士講身祿派と呼ばれる信仰集団を軸にして、食行身祿の考え方を継承する富士講にとって、平穏な日常としての「救済」ということよりも、信者達のより良い生活への向上が「救い」なのではないかということと、「敬い畏れる」神ではなく、信者の生活を規定する教義を心的権威に転化して保証を与える神を想定していたのではないかと、という2点を中心にして考察を試み、これからの研究テーマとして、富士講身祿派に見出せるであろう信仰生活を考えていくための出発点と位置づけるために、この論を試みた。出発点としても心許ないものであるかもしれない。本論のなかでもいくつか未検討の課題を残し、以後の検討課題と言う事で残してしまった。この課題を一つづつ考えていくことが、

これからの研究テーマになると考えている。

身禄という人の考え方は単純なものであるが、非常に興味深いものである。従来の信仰に基づきながらも、そこから日々の生活の大切さを説いている。これだけ見ると、信者は神の道具として行動せよと言われているような気もするが、決してそういうものでもない。身禄の考え方には厳密な意味での禁欲という言葉は見いだすことは出来ないように思われる。瞑想（おがみ）によって救いを得ようとすることは、身禄にとって救いを得る方法として良くないことであった。

身禄の考え方を理解するためには、当時の思想などもある程度把握してみなければいけない。富士講身禄派は以後、丸山教や扶桑教と言ったいくつかの教派神道の基盤となっている。身禄のような考え方から出発して、以後の日本の信仰世界がどのように変化していったのか、この事を考えてみることは、少しだけ、見えてきた気がする。

#### 参考文献

- 岩科小一郎 『富士講の歴史 江戸庶民の山岳信仰』 名著出版 1983年  
 平野榮次編 民衆宗教史叢書16『富士浅間信仰』 雄山閣出版 1987年  
 井野邊茂雄 『富士の信仰』 古今書院 1928年（名著出版から復刊 1983年）  
 三田村玄龍 『信仰叢書』 八幡書店 1914年（八幡書店から復刻 2000年）  
 村上重良・安丸良夫編 日本思想大系67『民衆宗教の思想』 岩波書店 1971年  
 佐和隆研編 『密教辞典』 法蔵館 1975年  
 小口偉一・堀一郎監修 『宗教学辞典』 東京大学出版会 1973年  
 中村元 『仏教語大辞典 縮刷版』 東京書籍 1981年  
 折口信夫 折口信夫全集『第三巻 古代研究（民俗学篇2）』 中公文庫 1975年  
 M. エリアーデ 風間敏夫訳 『聖と俗』（叢書・ユニベルシタス14） 法政大学出版局 1969年  
 島蘭進 『新新宗教と宗教ブーム』 岩波ブックレット 1992年  
 島蘭進 『現代救済宗教論』 青弓社 1992年  
 Max Weber, Wirtschaftstheorie der Weltreligionen. Vergleichende religionssoziologische Versuche, Zwischenbetrachtung: Theorie der Stufen und

Richtungen religiöser Weltablehnung. 1920-21

ーM. ウェーバー 『世界宗教の経済倫理』より「中間考察－宗教的現世拒否の段階と方向に関する理論」（大塚久雄・生松敬三訳 『宗教社会学論選』 みすず書房, 1972年）

『十条富士講調査報告書』 文化財研究紀要別冊 第五集 東京都北区教育委員会 1991年

『田端富士三峰講調査報告書』 文化財研究紀要別冊 第九集 東京都北区教育委員会 1995年

安丸良夫 『日本の近代化と民衆思想』 平凡社ライブラリー 1999年

### 注

1) 平野榮次編『富士浅間信仰』p75-79

2) 食行身祿の業績を知るうえで重要な史料とされているものとして、本文中で述べた『三十一日の御巻』がある。これには様々な流布本があるが、本稿では安丸良夫・村上重良編『民衆宗教の思想』所収「三十一日の御巻」（以下「大系版」）、および三田村玄龍編『信仰叢書（復刻版）』所収「不二行者食行録」（以下「叢書版」）を主要な史料として用いている。脚注以下に述べられている業績については、あえて両史料で述べられていることを主に概説した。

3) 仙元神などとも称されている。富士講の信仰における主神的な神性である。

4) 安丸良夫が『日本近代化と民衆思想』という論集のなかで展開する論の重要な概念の一つである。

5) 井野邊茂雄『富士の信仰』p61

6) 同上p64-65

7) 『田端富士三峰講調査報告書』p10-12

8) 『富士の信仰』p108

9) 安丸良夫・村上重良編『民衆宗教の思想』p428

10) 叢書版p459, 六月十三日より。

11) 大系版では、「一切のあらゆる種のもとふらせ」とある。

12) 『富士の信仰』p109-111

13) 叢書版p461, 大系版p430, 六月十六日より。



- 14) 叢書版p460, 大系版p429, 六月十四日より。
- 15) 叢書版p466, 大系版p442, 七月朔日より。
- 16) 叢書版p463, 大系版p435, 六月廿三日より。
- 17) 大系版によると, ここでいう世界は「三国」を指している。
- 18) 叢書版p467, 大系版p443-444, 七月三日より。
- 19) 五障三従とは、『佛教語大辞典』によると, 女性もっている五種の障害と, 三種の忍従とを言い, 女性は梵天王・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏になることができな  
いと言うのが五障, 幼時は親に従い, 結婚すれば夫に従い, 年老いたときには子  
に従うというのが三従である。「御巻」にはこうした仏教の思想の影響がよく見ら  
れる。
- 20) 叢書版p464, 大系版p436-437, 六月廿四日, 廿五日より。
- 21) 叢書版p465, 大系版p439, 六月廿八日より。
- 22) 『新社会学辞典』 p271
- 23) 『宗教学事典』 p121
- 24) ここで言う「天子」は將軍を指す。身祿が言う「天子」という言葉の意味には,  
天皇の別称としての「天子」と, 天下を治める為政者(將軍)という意味をもった  
「天子」と, 二つの意味が使われることがあるようである。この点は, 江戸中後期  
の庶民が考える為政者に対する考え方や, その当時の政治思想が反映されていると  
考えられる。
- 25) ここに引用した「お添書の巻」は, 岩科小一郎の『富士講の歴史』に所収された  
ものを用いている。
- 26) 島蘭進『現代救済宗教論』 p8-9
- 27) 島蘭進『新新宗教と宗教ブーム』 p12-13
- 28) 叢書版p460, 大系版P429, 六月十四日より
- 29) 叢書版p470, 七月十日より。大系版の七月十日は, 生死のもつ意味についての記  
述などがあり, 内容が著しく異なっている。
- 30) M. エリアーデ『聖と俗』 p3
- 31) M. ウェーバー 大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』 p65-66
- 32) 折口信夫全集『第三巻 古代研究(民俗学篇2)』 p3-4
- 33) 『富士浅間信仰』 p3

34) 『日本の近代化と民衆思想』 p164-166

(わたなべしゅうじ 佛教大学社会学部社会学科博士課程)

## Study of the Fuji-ko: Premodern Religious Life

Shuji Watanabe

This paper is a first-step study of the Fuji-ko religious movement which was very popular in Edo and its outskirts during the middle and the later part of the Tokugawa Bakufu Period (1733-1860). After an overview of the origin of this movement and its initiator Jikigyo Miroku, followed by a description of its sacred text "Thirty One Days of the Book" ( Sanjuichinichi no Onmaki), the meaning of "salvation" in this context and the divine source (kami) from which it derives, is analysed, and the religious characteristics of the Fuji-ko are revealed.